
命の狩り方

木々田 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の狩り方

【Nコード】

N9242R

【作者名】

木々田 朔

【あらすじ】

一般的なクズが危ないヤツに勧誘を受けるが…。

地雷

家から走って30秒の公園で俺はベンチに座り、ぼーっと月を見ていた。

「人が居ない時間だから落ち着くわー。」

遠く光る真ん丸の月を見ながら1人こちる。

…最近、孤独を感じるなあ。

2週間程前から高校休んで世に言う引き籠りを体験しているのだ。

母の目と父の頭を抱える姿を見たら家も居づらくなり、同級生に会わないために夜型の生活に変えて着々とグズの仲間入り！。

「うるさい。」

瞬間、自分の頭と無意識に会話していたことにハッとす。恥ずかしさに腹が立つ。

「…ごめんねー？」

「っ…！」

後ろから声がして反射的に振り向いた。

そこには公園を囲むフェンスの上にしゃがんで、白いイヤホンを左耳にさす男が右手にイヤホンの片割れを摘まんでスマイルしていた。

「音もれしてた？」

「……………いつ、いえ。」

自分が思ったよりも声は低く、小さい上に掠れていた。

時間を掛けて混乱を解いてとりあえず返答に答えるのが精一杯だ。

「そう、なら良かった。」

「いつから居たんですか？」

「ついさっき。」

「…。」

男をまじまじとみる。顔の見た目は20代くらいでイケメンか。ふんつ。

清潔に切り揃えられた金髪に琥珀みたいな茶色の太いフレームのメガネ。

黒いスーツに金色のネクタイをゆるく締めている。同じく黒い革製の鞆が尻に下がっているのでワイシャツの上にベルトをしてるのだらつ。

靴は黒いメッシュと底はグレーのゴムで動きやすそうな作りを統一してる。

「あんまり見られると穴あいちやうよ。」

「あはは…。」

ギャグセンスは残念ながら、残念である。

「…君、ちょっと面白いねー。これかけて公園見て。」

男が掛けてたメガネを手渡される。あまりに良い笑顔で流されるまま、俺は掛けて公園を見た。

地雷2

「!!!」

「ククツ…。」

認識した瞬間、目を固くつむって体を屈めた。

…これは何だ？何が起こっていた？

メガネ兄ちゃんにメガネ渡されて、掛けた途端に見えるのは血溜まりと沢山のバラバラ死体と走り回る女。

「君も大人なんだから、割り切ってちゃんと見なよ。それに、彼女が切ってるのは豚だよ。」

女ならうつとりする優しい声音で、あれは豚だと聞かされ薄目からゆっくり目を開いて確認する。

俺の場合は大人というワードが俺の僅かな自立心をくすぐり、ムキにさせたのが理由である。

左側の視界に男が入っている。いつの間にかフェンスの上から、俺の隣に鞆を腹に回して腰掛けている。

アンタは忍者か手品師か。

「…やっぱり人だろ。」

「形は人だけど中身は豚が、豚のような化け物が詰まってる。」

後半の喋り方がゆっくりとはっきりと言う辺りいやらしい。

見てて気分の良いものではない上に俺は人より肝っ玉が小さい方だ。けど、男と距離が近くなって心強くなったのかもしれない。

「あの女…美人だな。」

「君、ああいうのがタイプ？」

「いや…肉食系女子にも程があんだろ」

「あっはっはっ確かに。」

すげー若くて美人なのにかなり大きな太刀持って次々と人を細切れにしていく。

…いや、むしろそのギャップがイケるかも知れない。

「でしょ？俺もそこ、気に入ってるんだ。」

「……。」

「君の考えてること全てお見通し。」

…ばーかばーか。

「あのね、初対面で馬鹿とは失礼じゃない？」

「…初対面で悪いけど勝手に心読むなや。」

…マジで読めてるのか？何こいつ超能力とか持ってるの？

「超能力…ねえ。」

「だから読むなや！」

「声みたいに勝手に聞こえるから。」

「…まあいいや。これは何か教えて。」
「……………」

仲がそこまで良くなっていないから、あえて冒頭にそろそろを付けなかった。

軽めに言っつてこの光景についてサクッと説明させるためだったが、意外と用心深い。

解体ショーをしばらく見ながら待っていると落ち着いた声で返答がきた。

「教えたら君も連れていかなきゃだから無理。」

「何だよ、期待したのに。」

「俺たちの組織にくる気があるなら言っさ。でも仲間入りしてもらう。」

わざとらしく20分程前の俺の思考を唱えた男に嫌悪感を抱く。

「ふーん。俺はお前が嫌い。」

「ふふっ、照れちゃうよ。」

…誉めてない。

「落ち込まないですよ。」

「誰のせいだ、誰の！」

「ねえいつまで遊んでるの？コイツ誰よ？」

気が付くと女が仕事を片付けて俺達の前に振り返り血に濡れて立っていた。

肩に大太刀を背負った姿は男勝りの言葉が似合っただろう。

地雷3

女の格好は黒いジャケットとスカート、共に金のチャックが左胸や腰等に置かれたものでチャックは全て律儀に閉まっている。

ワイシャツは深紅に染まったため首に締めた赤いロングリボンと同化し、靴は男と同じものを履いていた。

黒髪は後ろを長く伸ばし、左寄りに分けた前髪は普段から右目を覆ってしまう。

癖毛なのか所々うねってはいるが、左右対称になっているので綺麗に彼女の特徴を表していた。

「危ない人に教える名前はありません。面倒そうなので帰ります。」

9

掛けていたメガネを外し、男に差し出す。女と20近くの死体は見えなくなった。

「沢山持つてるからあげるよ。もし、俺達の仕事に興味あるならここに電話して。就職できるよ。」

「まじっすか。時給いくらで?」

「全員社員扱いだから活動しなくても必ず月20万は入る。」

「え!? 嘘くさい!」

と言いつつ渡された名刺をジッと見る。会社名、裏側って書いてある。

「怪し…ふーん、アンタ萩原って言うんだ。」

「うん。萩原からの指名だって言えば一発採用だよ。入ってから抜けても良い、早速入っちゃおう？」

「まだ考えます。それじゃ期待せずに待っててください。」

「ククツ…。またね。」

とりあえず、これ以上勧誘を長引かせないために帰ることにする。

就職難の時代なんだ。俺はそんな甘い話に騙されてたまるか。

でも月20万か…いや、あんな仕事するなら辛い。人を殺すなんてどうかしてるだろう。

アレが人じゃないなら？このメガネでしか見えなかった。欲と倫理が混ざる。

「糞ッ、アレが何か聞きそびれたな。」

モヤモヤが深くなつて愚痴をこぼす。結局、萩原は表面だけ教えて肝心なことははぐらかしたのだ。

沸き出したイライラをどうしようもないことだと割り切つて深呼吸をする。目を開ければ玄関が見える。

今日は疲れたから寝る。風呂は明日入ろう。楽しい音楽を聞きながらじゃないと悪い夢を見そうだ。

地雷4

「メガネあげちゃって良いの？」

「百均だから良いよ。勧誘用に20個買った。」

先程まで透明だった女にVサインを送る萩原。女は目を細め、ダルそつに受け流した。

「君はもう少し他人に興味持った方が良いと思う。」

「めんどい。」

遠回しに自分が面倒だと言われた気がしてショックな萩原は女と5秒見つめ合い、悩み抜いた末に残したコメント。

「…美人らしい発言だ。」

「あつそ。」

女は背負った太刀を道端のブロック壁に向かって投げ、スタスタと公園を出て行った。

太刀は水に投げ込まれた用に壁に波紋を浮かべながらスツと入って消えた。

萩原は彼女が見えなくなるとスーツの懐から携帯を取り開き、会社へと発信する。

「…もしもし、俺です。いつも通りなので処理お願いします。はい。ええ。セイタが出番くないんですよ。」

それに元々俺は尋問部ですから。ええ。それじゃ。」

電話を切り、ため息混じりにやれやれと呟いて萩原は月を見上げる。腹の上に置いた右イヤホンを耳に返して少し音量を上げ、自分の世界に入る。

上司からもっと働けとお叱りを受けたが、セイタと呼んだ女は獲物を横取りされるのが大嫌いなのである。

だから今回も肉体労働は彼女に任せて人員補充に務めた。

1カ月前に特攻隊が全滅してから自分が駆り出される様になったのは別に構わない。

しかし現場の担当上司は肉弾戦しか評価しない筋肉バカだった事は厄介だ。

上司もセイタも己を貫くのは構わないが、周りも少しは考えて欲しいものだと萩原はしみじみ思う。

「萩原さん？」

黒い中学の学生服を着た少女にいきなり顔を覗き込まれ少し驚く。

「やあサキ、凄く早かったね。」

「闇天に乗って飛んできました。」

両耳のイヤホンを抜いて身を引いたサキの後ろに居る2つを見やる。

1つは会社が飼ってる巨大カラス、通称闇天。技術部が作った自慢の化け物。

もう1つはサキと同じ制服きた少年。

これらも技術部が作ったクローン。」

「サジもお疲れ様。」

「大したことないです。暗い顔してますが大丈夫ですか？」

「最近寝不足だね。悪いけど今日は帰るよ。」

サキに細いフレームのメガネを2つを渡す。

「これで死体見えるからいいかな？」

「能力を分配したんですね。分かりました。」

「じゃあまた明日。それ、これからも使えると思うからあげるよ。」

「ありがとうございます。」

その後少し会話を交わし、公園を出て軽く手を振れば子供たちは気付いて笑顔で振り返してくれる。

これからあの子達は死体を切り刻み、カラスに喰わせる作業をするのだ。

地雷5

公園から出て20分弱、会社に到着した。

表向きは潰れたホテルだが初代社長が買い取って改装し、地下まで
仕事場を展開させた。

タイムカードは入って直ぐのフロント前にある。フロントと言っ
ても今は皆を癒す酒場になっているが。

萩原が入るとマスターがお疲れ様と言ってカウンターにジンの入っ
たグラスを滑らせる。

その席の隣にはセイタが座り、瓶から直接ウイスキーを煽っていた。

「マスター、悪いけど今日は遠慮していいかな？」

「あらどうしたの？浮かない顔しちゃって。」

女特有の高い声を出すマスターはスキンヘッドのマツチヨなゲイ…
訂正、ダンディである。

声と心だけは美女であるが騙されてはいけない。

セイタは会話に感心が無いようで真上を向いてグイグイ飲んでる。

「大丈夫、寝れば直るから。」

「私の目は誤魔化せない。ささっ、座って座って。」

「ククツ…マスターには敵わないな。」

マスターは愛苦しいタイプで強く断ると悪い気がするの、いつも萩原が折れてしまう。

押したタイムカードを戻してカウンターに座る。

調度セイタも居ることだ。これを機会に相談すれば良いのかも知れない。

「相談の前に昼から何も食べていないんだ。ハヤシライスお願い。」
「まあ、ちゃんと食べなきゃ駄目じゃない。ふふっ待ってて、腕に寄りをかけて作るわ。」

ヒラヒラの迷彩柄のエプロンを身に付けウイंकするマスター。流石、元軍人。

待ってる間にセイタに話を持ちかける。

「ねえ、セイタ。」

「ん？」

「君に相談があるんだけど。」

「獲物はやらんぞ。」

「…正解、その事だよ。」

セイタは冗談のつもりで言ったようで少し困りながら顔をこちらに向ける。

「なんだ、言ってみる。」

「さっき携帯で君の上司からお叱りを受けた。萩原も戦わせてやれって伝言を預かってる。」

セイタは黙って考えている。嘘をついてしまったが、そうでもしなきゃ彼女は譲ってくれない。

仁をチビチビ飲みながら返答を待っているとセイタは涙目になりながら口を開く。

「まあ…仁さんの言うことなら…仕方ない…か。」
「ありがとう。」

そんなに嫌なのかと心が痛んだが、自分の悩みが解決したので正直安堵する。

「俺だつて強いよ。」
「分かつてる。だから嫌なのよ。」
「俺は、俺よりもセイタが強いのは分かるよ。」
「…そうね。」

負けず嫌いなセイタは強がりをよく言う。

萩原にとっては泣かれるより助かるので相性は悪くないが、彼女の無関心によって互いの距離は常に一定である。

「あ、私も聞きたい事がある。」

そんな彼女からの質問に萩原は興味混じりに、なになにと続きを促す。

「今日のアイツなんで勧誘したの?」

地雷6

「なんでって…うーん。」

萩原は目を細めて線にする。顎には手を添えて首を右に傾け、如何にも考えるポーズ。

そこへセイタが回答を心待ちに右肘をテーブルについてそれに顔を乗せる。

「アイツは入社する。私としては正直、来て欲しくない。」

「どうして？それに来るとは限らないんじゃない。」

「お前が勧誘した人間は何故か全員やってきた。名乗りもできないアイツに私は腹が立つんだよ。」

「じ…」

自分に似てたから？と質問しようとして萩原は自分の口をジーンで塞ぐ。

そんなこと言ったら最後、酒場は戦場に変わるだろう。最悪、墓地に形態変化もある。

そんな時にナイスタイミング。息を切らしてマスターがハヤシライスを持ってきた。

「はあはあ、はあいお待たせえ…！」

「ありがと。早速いただきます。」

「上にかかっているヨーグルトはポイントよ!」

マスターの決め台詞。最近、誰かに聞いたが男性限定の台詞らしい。この料理はどれも絶品だが、いつもマスターが何かに体力を割いているようだ。

キッチンは客に見えない設計になっているので一体、中で何をしているのかは誰も知らない。

「うん美味しい。セイタも食べる?」

「…要らん。話を戻すぞ。」

「何故誘ったか、だよ。それは俺が質より量を重視するから。」
「意地悪しないで教えてよ。簡単に。」

セイタの声が低くなっていく。早く核心を知りたいようだ。

マスターは萩原の顔をしばらく見て満足そうにキッチンへ片付けに向かった。

「簡単に言うと俺は必ず入社する人間だけを狙ってる。」

「お前は心を読めるけど未来も読めるの?」

「それは流石に…けど、予測は付けられる。」

萩原は右手に持ったスプーンを目上に向けて乗っているハヤシライスを見つめる。

「社会的にクズ扱いされる人間は孤独を感じ、同じクズ同士で固まる。」

それは事実、この会社が証明してるだろ？」

「まあ、そうね。」

「今日の彼も少し前に不登校になって自分で居場所がないと感じてた。」

「そういう人は優しくされたり、誘われるのに弱いんだ。」

「プラス非日常。」

セイタが自分の入社理由を付け足す。彼女は非日常を求めて裏側にやってきた。

「そうだね。それに憧れる人もいる。」

「うん：大体分かった。つまり誰でも入れれば数合わせにはなるって事ね。」

「そういうこと。」

萩原はパクっとスプーンの上で冷えたハヤシライスを頬張る。

地雷7

「それでも私は気に食わない。」

尚もセイタは引きずる。無関心者は一度関心を持つと密度が高い。

萩原は困って少し気まずい沈黙が流れたが、何かを思い付いたように口を開いた。

「俺も彼と相性は良くないかもね。」

「…ならあの時メガネを返してって言いなよ。」

セイタは怒りを噛み殺しているようで目を閉じている。

この場を丸く納めるには一時的でもセイタの関心を削ぐか他に向ける必要がある。

「…君の困る顔が見たくて。」

「…。」

セイタは目を開いて萩原をしばらく見つめると、しかめっ面をしてマスターを呼んだ。

「会計。」

「はい1280円よ。」

「釣りは要らん。帰る。」

早口で会話をこなし1300円を受け皿に投げると一目散に出てい

った。

一応、削ぐことには成功したが自分に関心を向けられなかった萩原は残念な顔をする。

「…つれないなあ。」

「それがいい女、でしょ？」

「ククツ。確かに。」

レジに金をわけながらマスターがフォローを挟む。そこに背後から威勢の良い男の声が飛んできた。

萩原の背後にいくつかある丸テーブルの1つに6人の男が腰掛けている。

「マスター！ありったけのビール持ってこいや！」

「あら勝負するのね。報酬は？」

「俺が勝ったら10万！ジェームズが勝ったらこの場、全部奢りだ！」

「すぐ用意するわ。じゃあ私からは勝った方にお酒のタダ券あげる。」

観客も含めて雄叫びが上がる。萩原はグラスに半分残った酒を流し込むと食事を再開した。

「ジェームズ！お前が俺の彼女に手を出した罰、思い知れえ！」

「アキラよ。自分に魅力が無いのを棚上げするな。」

「んだとゴルア！忍者は忍者らしく影でコソコソしてろや！」

「忍者が逢い引きして何が悪い。お前が浮気してると彼女は知ってたぞ。」

「ぐっ…うるせっ！一番は幸子だあ！」

みつともない会話が交わされて行く中、マスター走る走る。萩原食べる食べる。

「マスター！会計ー！」

「はい！2140円ねー！」

食べ終えた萩原が手を振ってマスターを呼ぶ。周りが騒がしいので互いに声が大きくなる。

受け皿に丁度払って店を出る。駐車場に停めたバイクに乗り、エンジンをかけて自宅に向かった。

地雷 8

窓を覆う黒いカーテンの隙間から陽射しが部屋に入り、男の短い黒髪を照らす。

ベッドに横になり携帯から繋がるイヤホンを耳にさしてニヤケながら眠っている。

そこへ餌を求めた黒いチワワがよじ登り、布団から覗く足を見つめた。

足の裏を舐めてみるが反応は無く、やれやれと鼻息を鳴らして思い切り足首に噛み付いた。

「…いいーてーてっ！痛てーって！」

ボサボサ髪の男は勢い良く起き上がり、裏返った声で訴えながら足から犬を引き剥がす。

携帯を開くと13:10を表示している。それを見て犬が高く吠える。

「分かったから吠えるなよ。」

ベットから降りて冷たいフローリングをダルそうに歩き、犬は飛び降りて付いていく。

餌箱に目分量でドライフードを入れると一生懸命がつつき始めた。

男はベットに戻ると枕元にあるタバコを一本取り出してくわえ、火をつける。

少し吸って紫煙を吐き出しながら犬の近くにある棚に置いた灰皿へ向かう。

しばらくすると自分の部屋にスリッパの足音が近付いてくる。

足音はドアの前で止まって控え目な母の声がかかる。

「カナター。起きたの？」

「起きてるよ。」

ドアを開けて母がカナタを一瞬見たが、視線を右手のタバコに移す。

「ご飯、茶の間で食べる？」

「何にも言わないんだ。」

「なんとなく知ってたよ。お父さんにバレるんじゃないよ？」

「はいはい。…腹減った、これ吸ったら行くわ。」

「わかった。用意してるから早くね。」

母は静かにドアを閉めると去っていった。

カナタは足元に寄ってきた犬を撫でながら、タバコを3分かけて吸いきると茶の間に向かって部屋を出た。

茶の間のテーブルに座ると母がキッチンから2つの丼とカップをお

盆に乗せて隣に座る。

器の中にはカツ丼が入っていた。母はカナタに重なった空のカップ2つを差し出す。

「コーヒー入れて。」

「母さんお願い。」

「カナタの方が近いっちゃ。」

「仕方ないなあ。」

カナタは受け取ったカップにインスタントコーヒーとポットの湯を投入する。

母は自分とカナタに箸を乗せたカツ丼を配るとリモコンを取ってテレビをつけた。

「はいコーヒー。」

「あいありがとう。」

2人は挨拶無しに食事を始める。テレビは再放送のドラマを映している。

「アンタも有名人になれば良いのにねー。」

「無茶言っつなよ。」

テレビを見て言う母に笑いながら答えるカナタは一瞬固まって口を開く。

「そっついえばぢ。」

「なに？」

「昨日、仕事の勧誘受けたんだけどさ。」

地雷9

「…誰から？」

「いやね、昨日夜歩きしてたんだけど」

素早く母がカナタの頭上に右手で拳を作り降り下ろす。「ごっくん」。

「…。」

「続けて。」

「はい。それですね。」

呆れた顔をしてカツを食い千切る母に経緯を聞かせる。

「…という訳で、名刺を貰って帰って来たんだよ。」

再度、母から強めの「ごっくん」。

「あのなあ。さっきから人を目覚まし時計のようにッ…！」

「アンタが公園で寝っ転がって悪い夢みて帰って来ただけじゃないの！」

期待させんじやないよー！」

「嘘じゃねーよ。今、名刺持ってくるって。」

「飯食ってからにしな！」

「いいから待ってる。」

駆け足で自分の部屋に入り枕元にあった名刺を取ると吠える犬を無視して茶の間に戻る。

「ほら。」

「どれ、会社名裏側って。萩原京志郎。」

「それが俺を誘ったヤツ。古臭い名前だけど見た目は金髪のイケメンだったぞ。」

名刺を受け取った母は渋い顔をして見ていたがイケメンのワードに目が光る。

「その人何歳？金持ち？」

「おい。夫愛してやれよ。：月給20万って美味しいよな。」

「そんな良い話がある訳無いでしょ。危ないから止めなよ。」

「：だよな。」

それから2人は無言で食事を終えて母はカナタの分も食器を回収しキッチンへ向かっていった。

カナタはテーブルの上にある名刺を手に取り、少し見つめると自分の部屋に持ち帰る。

一服しながら母の言ったことを思い返して表情を暗くする。

母は今まで一度も息子にやってみろと言ったことが無いいつまでも子供扱いで大人として認めていないのだ。

やめると言われ続けると自分の価値が駄目だと勘違いしそうになる。

カナタは名刺に記された電話番号を確認して携帯を手に取り、間違えないよう入力して発信し耳に当てる。

最早学校に行く気は無く、夜に活動するなら同級生に会うこともないだろう。

自分はまだ子供じゃない、金を稼ぐなら何でもやってやると感情を意地に任せる。

地雷10

5回目のコールで発信を切り携帯を畳んで握りしめる。

「……………」

携帯が震え着信のメロディが鳴る。

「げ、かかってきたよ。」

やはり我ながらビビりであった。

腹をくくって携帯を開いて耳に当てると聞き覚えのある声。

「もしもしー？どちら様？」

「ってアンタかよ！」

「あ、もしかして社員応募かな？」

「…違います。」

皆ご察しの通り、声の主は萩原だった。そしてつい反射で拒否してしまつた自分に軽く悲哀。

「そのお…一つ、聞きたい事があっただけです。」

「ああそう。何が聞きたいの？」

「最初にアンタは俺に入つて欲しくないって口振りだったのに、すぐ気が変わったみたいだに勧誘した。なんで？」

仕方なく自分が気になっていた話をする。それに誰だって矛盾って

のはスッキリしないだろう。

「それはねえ……。」

「む？何か俺が聞いちゃ不味いこと？」

「いやあ自分でも大人気ないからさ。」

「……………」

「……まあ、理由は単純なんだ。」

こういう場合はあえて黙ると怒っていると相手が勘違いして折れてくれるので実用的である。

「君が俺のギャグセンスを残念って言ったから。あはっ。」

あはっじゃねーっの！星を飛ばすな星。

「は？それがなんで勧誘に繋がる？」

「君、面白そうだから。今こうやって話すのもかなり楽しいし。」

「どうも。なんかはぐらかされた気がするが。」

「ククッ、でも事実だよ。」

「あっそう。」

「うん。で、もう一度だけ聞くけど入らない？」

「……どうしようかなあ。やってはみたいんだ。」

「じゃあ入ってよ。人手に困ってるし。」

「んじゃあ……やる。」

「了解。じゃ後でこっちから電話するから待ってて貰える？」

「分かった。それじゃよろしく。」
「はい、またね。」

電話を切ってベッドに寝っ転がる。結果的に目的達成したから良しとして、とりあえず寝よう。

職は決まったものの人殺しだよなあ…無理じゃね？

萩原は殺らずに見てるだけだったけど偉いから伸び伸びできるのか…？
「つーかあいつ偉いのか？」

入社したから口調はどうすっかな。敬語使いたくねーな！

そんな事を考えてるうちに着信が入った。画面を見たらさっきの番号、めんどいから後で登録しとこう。

通話を押して再度、耳に当てる。

「もしも…」

「敬語じゃなくていいよー。」

「死ね。」

しまった…ついケータイを畳んでしまった。もう好き嫌いじゃなくて生理的にまで進行した最悪のガンだ。

震えるケータイを開き溜め息気味の深呼吸をしてから慎重に取る。

「悪いが電波切れたっぽい。」

「ククッ、そう。それじゃあ日程言っね。明日のあの公園に0時集合できる？」

「了解。持ち物とかは？」

「ん〜特には無…ああ、メガネ持ってきて。」

「それじゃ明日。」

「つとね、一応やっておく事はやっておいた方がよいよ。」

「宿題とか？」

「……………」

「なんだよ。」

「まあ宿題というより会話とかさ。それじゃ頑張っつてね。」

「ああ、じゃあな。」

通話を切り、少し考えて気付く。違つかも知れないが直感でそう思う。

「遺言的なアレかよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9242r/>

命の狩り方

2012年1月12日02時52分発行